The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	留学生活への期待と満足 ： 短期留学特別プログラム参加生の声
Author(s)	北澤, 美樹
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2011, 45, p. 65-82
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25107
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

留学生活への期待と満足

――短期留学特別プログラム参加生の声――

北　澤　美　樹

キーワード：留学生30万人計画，短期留学特別プログラム，質的ケーススタディ，インタビュー，留学生活の満足

1. はじめに

現在、日本の高等教育機関で学ぶ留学生総数は、141,774 人（平成 22 年 5 月 1 日現在、日本学生支援機構）に上っている。さらに、政府は平成 20 年に、日本を世界により開かれた国とし、アジア、世界の間のヒト･モノ･カネ・情報の流れを拡大する「グローバル戦略」を展開する一環として、2020 年を目途に 30 万人の留学生受け入れを目指す「留学生 30 万人計画」を打ち出した(首相官邸ホームページ)。今後、日本の大学には留学生がいっそう増えていくだろうと予想されるが、この計画内で、今後の留学生獲得構想に関して重視されているものの一つに短期留学の推進が挙げられている。日本語のできない留学生にも日本留学の門戸を開き、大学内の国際化を推進することを目的とした「短期留学特別プログラム」が、今後の留学生獲得の有効な武器となりうることは廣瀬（2006）によっても指摘されている。「短期留学特別プログラム」とは、大学内の国際化を推進することを目的として、留学生側の日本語能力が障害にならないようにデザインされたプログラムのことで、事実上英語を公用語としたプログラムのことを指す（以下、短プロ)。今後、「留学生 30 万人計画」の達成には短プロの果たす役割が大きくなるであろうと予想できる。

しかし、1995年度に「短期留学推進制度」が示され、担当教員の増員が認められたのを皮切りに、各大学で短プロが開設・運営され始めて[1)]以来、行われてきた短プロに関する研究の多くは短プロ担当教員による実践報告書のような形のもので、参加生へのアンケート調査などを基にした短プロ全体の体系的記述、あるいは担当教員の所感程度に留まってしまっている。このような報告書は概して、留学生30万人計画にも表されている、大学のグローバル化に向けた作業の一環として、トップダウン式に短プロを発展させていこうとする運営側視点に立っており、短プロ参加生個人の声に焦点が当てられてはいないと言えるだろう。短プロ参加生個々人の声に直接焦点をあてた研究としては、中山（2001）により、短プロ参加生のソーシャルネットワークを明らかにすることを目的としたインタビュー調査がなされているにすぎず、全体を見ると、まだまだ公表されている研究自体が少ないというのが現状である。そもそも、短プロ参加生に関する研究が少ない理由の一つに、彼らが抱える問題が明らかになることで、日本学生支援機構（JASSO）からの奨学金枠削減等のペナルティの懸念があるとの見方から、短プロ実施大学側がこれまで公開を控えてきたという経緯があり（廣瀬，前掲）、今後のよりよい短プロの発展のために各大学間の問題事例の共有、さらなる議論が望まれている（廣瀬，前掲）。

2. 研究目的

前節に述べたように、これまでの研究からは短プロに対する一般的な不満の傾向や、プログラムに今後改善すべき点が散在していること等はうかがえるが、短プロ参加生が全体として1年間の日本留学という経験をどう捉えているのかが全く見えてこない。筆者が過去に一大学生として短プロ参加生と交流を持った経験では、彼らはプログラム自体に何らかの不満を抱えつつも、留学全体としてはそれぞれ満足感をもって1年という期間を

修了して帰国していくというケースが多かった。

短プロ参加生はいったい何を不満に思うのか、その不満は最終的にどのように満足に変わるのか、本研究はこれらの疑問に答えを出すために行われた研究であり、短プロ参加生ひとりひとりの経験に根ざした声を聞きとり、それを発信することを目的とするものである。ひとりひとりの経験に根ざした声とは、すなわち彼らが日本でどんな経験をし、その経験にどのような意味づけを与えているのか、これらの問いに対する答えである。

3. 研究概要

3.1. 調査方法

短プロ参加生ひとりひとりの経験への意味づけを明らかにするために、本研究では、Z大学（仮称）が実施する短プロ「Zプログラム（仮称）」の参加生8名[2)]を対象に、インタビューを中心とした質的ケーススタディを行った。質的研究者がインタビューを用いる理由について、Patton（1990）は以下のように述べている。

> *われわれがインタビューするのは、直接観察できない事柄を相手から引き出すためである。（中略）感情、思考、意図といったものは、観察することができない。過去の行動も観察できない。観察者が立ち入ることができない状況も観察できない。人びとがまわりの世界をどのように体系化し、そこで起こっていることにどのような意味づけを行っているかも観察できない。そのような事柄について知るためには、われわれは、人びとに質問しなければならないのである。それゆえ、インタビューの目的は、他者のものの見方の中に分け入っていくこととなる。（Patton, 1990：196、メリアム，2004より再引）*

以上から、インタビューが本研究にもっとも適したデータ収集法である

と判断し、本研究では各協力者に1回～2回、1回につき約35分～65分のインタビューを実施した。インタビューでは質問項目を限定することなく、「この日本での○か月（主に日本留学7～9か月目にインタビューを実施）を振り返ってどうですか？」という抽象的な質問から始めて、協力者が語ったことを深く掘り下げていく形をとった。また、インタビューには日本語と英語を併用した。インタビュー開始時に「自由にあなたが自分の考えを話しやすい方で話してください」と伝え、どちらの言語を使うかは相手の判断に任せた。そのため、ほぼ英語でインタビューを行ったケース（A，C）もあれば、協力者は英語で研究者が日本語、あるいは部分的にその逆（D，F，G)、またほぼ日本語で行ったケース（B，E，H）もある。

3.2. 分析

複数のケースを扱うマルチプル・ケーススタディでは、通常、ケース内分析とケース間分析の2段階の分析作業が行われる。本研究でも、まず第1段階の分析手順として、各インタビューの文字化データから、概念を抽出し、それぞれの概念をカテゴリー化し、さらに各カテゴリー間のつながりを明らかにするというプロセスを経て、各ケース個々の深い理解を試みた。続いて、第2段階のケース間分析では、研究協力者8人の各ケースを横断的に比較し、その共通点を見つけることを試みた。

4. 結果

ケース内分析によって、各ケースが語る日本留学の経験とそれへの意味づけは、それぞれ異なっていることが明らかになった。そして、続くケース間分析の結果、各ケースが留学中に何かしらの不満（フラストレーション・落胆・心残り）を感じながらも、結局のところ、この「日本留学の経験」全体に対しては、肯定的な感情（＝満足感）を抱いているという共通

点を見出すことができた。本論文では、紙幅の都合上、ケース間分析の結果にのみ焦点を当てて、以下述べていくことにする。

中山（2008）は、日本の大学に通う韓国人学部留学生のライフストーリーを通し、学生が留学生活に満足するかどうかのカギを握っているのは、本来それぞれの留学生が望んでいるもの、持っている期待であると述べている。また、Tarp（2006）は、EU 内の留学プログラムに参加したデンマーク人学生が留学経験をどう捉えているのかを、グラウンデッド･セオリー･アプローチを用いて分析した結果、学生が留学に対して抱いている期待や目的が、留学全体（満足感や異文化とのインタラクション、留学全体の成果など）に影響を与える大きな要素であることを明らかにしている。このように、学生が留学プログラムに参加するにあたって抱いている何らかの期待や目的が、それぞれの留学の満足感を左右する重要な要因と考えることができ、本研究でもその傾向が認められる。本研究の協力者たちの留学への期待を分類したところ、短期留学を通して、1）学術的知識を得る、2）ことば（日本語・英語）を学ぶ、3）日本人の友だちをつくる、4）新しい文化を経験する、という 4 つのタイプの期待を持っており、これらの期待が全てにしろ、一部にしろ、叶うことにより、最終的に留学という経験を満足できるものとして捉えるに至るというパターンが見られた。そして、これに加えて、本研究では「留学期間中に予想外に得た（当初は期待していなかった）もの」が、留学全体の満足感に繋がっていくことも明らかになった。

5. 考察

本章では、先に述べた、1）学術的知識を得る、2）ことば（日本語・英語）を学ぶ、3）日本人の友だちをつくる、4）新しい文化を経験する、という 4 つのタイプの期待と、5）留学中に予想外に得たものが、協力者た

ちの留学への満足感にどのように影響を与えているかを、協力者の声を引用しつつ、Ｚプログラム（短プロ全体）が抱える問題等と絡めて考察していく。そして最後に、6）全体としての日本留学への満足感を得られるプロセスについてまとめる。

5.1. 学術的知識を得る

まず、Ｚプログラム参加者が留学に対して抱く期待の１つに「学術的知識を得ること」がある。しかし、Ｚプログラムが開講する特別授業に対して各ケースから否定的な意見が多くみられた。特に、授業のレベルが大学の学術レベルにないことを、多くのケースが指摘している。

> There are some subjects that are not university level at all. So it's just going there and doing nothing. I don't have to do any exams or I don't have to learn, just go to the classes and that's all. ＜ C ＞

Ｚプログラムで開講される授業は、幅広い専門の学生全体を対象にしているため、どうしても内容が入門的にならざるを得ない。そのことはプログラム参加生も理解してはいるが、それでも不満を感じずにはいられない様子がうかがえる。また、その他に、教授陣の問題も挙げられている。

> Professors hardly spoke any English, so whenever they were teaching a class, we had no idea what they were talking about. And a lot of professors wrote down every single word they were going to say in class and they stood in front of us and read the whole thing and did not look at us once. ＜ G ＞

九州大学の短プロ“JTW”のコーディネーターである今井（2007）は、日本の大学教員の平均的英語力が、非英語圏の標準からみてかなり低く、

留学生の期待水準をクリアする英語力を駆使して講義できる人材の数が限られていることを指摘しており、英語による指導が可能な教授陣の確保を最重要課題として報告している。英語で指導可能な教授陣の確保は、短プロ全体の慢性的な問題であると考えて良いだろう。また、成績の評価方法が簡単すぎることを指摘するケース（A，F）があることからも、学生たちは授業にやりがいを求めているが、それがＺプログラムの授業には見いだせないことに、落胆を感じているという事実が見受けられる。

そして、これら授業や評価方法が簡単すぎることの弊害は、母大学に帰ってからＺプログラムで取得した単位が認められないかもしれないという不安となって現われてくる。

> For the whole course, you were graded based on your attendance and one paper, that was two pages long. That's not acceptable back home because it's too easy. Two page paper is not a paper, it's homework. So I don't know. I might have to make up my own essays and say 'oh this is what I've done' and lie to my home university. ＜Ｇ＞

単位互換を謳ったプログラムではあるが、実際には国に戻った後で、もう一度同じ学年をやり直さなければいけないという訴えは他のケース（A, B，F）にも見られるが、そういったケースの多くが、理系を専門としている学生である。さらに彼らからは、Ｚプログラムが開講している授業が、自分の専門にあまり関係がないことが不満だという声が聞こえてくる。

> Ｚプログラムの授業はつまらないと簡単すぎる。それ以外は普通の生活をしているからなんとか良いけど、学校の部分はちょっといやな感じがあって。おれの専門にＺプログラムの授業は関係ないから。自分の専門と関係がなかったし、それは不満とか。＜Ｂ＞

専門分野について学ぶことが一年間停滞してしまい、国に帰った後で研究の道に問題なく戻れるかどうか分からないことは、彼らにとって大きなフラストレーションとなるようである。一方、母大学で既に所定の単位を取り終えたうえでＺプログラムに参加しているため、単位に関して心配する必要がなく、国に帰ったら卒業を待つだけというケース（E, H）では、Ｚプログラムの授業が自分の専門とは関係ないとの言及があっても、それが特に「不満」となって現われてくることはない。

このように、短期留学特別プログラムが開講する授業やカリキュラムへの不満や落胆は、短プロを実施している大学の報告書の至る所に見られ、プログラムコーディネーターらが頭を悩ませる大きな問題である（隈本・長池, 2006、今井, 2007 等）。しかし、こういった不満や落胆を持ちつつも、学術的知識を得ることに対して、最終的に「満足」を得られたケースと、不満が不満のままで終わってしまったケースとがある。両者の違いは、自分のやりたいことが、Ｚプログラムが開講している特別授業以外の場で補完できたか、できなかったかという点において現われてきている。

> My independent study here, to actually get into this research, I had to interview a lot of Japanese women. So through that I got to know so much more than I couldn't have because the topic I chose, people don't really study so I can't find it in books, so I had to do it for myself because I needed the information. So it really helped me. ＜ G ＞

> （チューターは）いたけど、それもあまり会わないとか。その人もなんか（B の専門関係の）研究してるんですけど。そして研究室に連れていってくれてとか、なんか１時間英語で簡単な問題を説明したりしてくれて、なんかそれはいいんじゃないと思って。簡単すぎですから。

基本的なこと説明したり、そのこともう知ってる。＜Ｂ＞

このように、自主研究を通して、自分の専門に関連した研究や調査をすることができたので、結果として満足感を覚えているケース（C，G，F）がある一方で、研究室に所属しつつも、自分の専門や興味に関連したことができず、不満が不満のまま終わってしまったケース（A，B）もある。

5.2. ことばを学ぶ

ケース間分析の結果得られたＺプログラム参加者の期待の２つ目は、ことばを学ぶことである。留学の大きな目的のひとつは、そのホスト国で話されている言語を習得することにあると言える。本研究の協力者たちも、口々に日本語力向上を日本留学の目的に挙げている。しかし、Ｚプログラムはその性格上、日本語習得の役には立たないと不満の声も聞こえてくる。

なんかＺプログラムの授業だけでは、ちょっと足りないと思った。あのＺプログラムの授業はほとんど英語だから、日本語の勉強によくないと思って＜Ｅ＞

日本語力が不十分なので、英語で授業を提供するＺプログラムにむしろ自ら望んで参加することにしたケースもある（D，F）。また、英語を勉強することもＺプログラム参加の目的の一つである場合は、英語が共通語として使われているＺプログラムの環境には十分満足感が得られている（H）。しかし、「日本語を学ぶこと」を第一義にあげ、それが日本語で日本人学生と一緒に授業を受けることによって促進されると考えているＢやＥにとって、日本の大学で学んでいるというせっかくの機会が活かせないことは、不満以外のなにものでもない。

こういった特別授業への不満に加えて、Ｚプログラムが提供する日本語

の授業もクラスによってはやりがいがないようである。

> The teacher didn't have too much prepared for us. She gave us the quiz in advance the week before and said 'this page is going to be the quiz for next class' so we had all the answers in front of us. So she said, 'we are going to get tested on this kanji and this kanji,' so she told us in advance. So then it's not a test, it's memorizing. And we are not that stupid, we can memorize kanji. ＜ G ＞

このような不満は他のケース（A，C）にも見られ、教師に対してもっと授業を難しくしてほしいと要求しているが、結局どれもかなっていない。C はクラスを移動することで不満を解決したが、A と G はそのクラスを続けることを選んだため、授業に対する不満が不満のままで終わっている。

こういった状況の中で、日本語力を向上させようとした場合、Z プログラム以外の場所で日本語を学べる場所を作る必要があるだろう。例えば、読解力を伸ばすために、日々の生活の中で、日本語で書かれた表示（例：電車の中吊り広告）を読んだりした A の場合、短期間のうちに国で勉強してきた以上のことを学べたと日本語力向上に対する満足感につながっている。また、コミュニケーション力の伸長を目標とした場合、研究室のメンバーと日本語でコミュニケーションをとったり、まだ日本語を勉強し始めて間もない頃から、日本人学生向けのクラスに参加したりするなど積極的なケース（C)、とにかく日本人と話すことを第一義にして、見知らぬ人にどんどん話しかけていく積極性が見られるケース（D）の場合、概ね自分が 1 年でやったこと、身に付けた日本語に満足できている。また、日本人との積極的コミュニケーションに加えて、図書館で日本語の教科書を借りて勉強することで、さらに効果的学習ができたと高評価するケース（E，H）もある。一方日本人とコミュニケーションをとりつつ日本語を学

びたいのに、それができずに、ただ人が話しているのを聞いているだけ、あるいは家で日本のドラマを見るだけで、自分の希望に反して日本語学習が独学中心になってしまい、聞きとりの練習にはなったと評価しつつも、不満が拭いきれていないケースもある（F）。

5.3. 日本人の友だちを作る

続いて3つ目の、日本人の友だちを作るという期待について考えたい。第2言語習得において、ホストコミュニティのメンバーとソーシャルネットワークを構築することは、非常に大きな役割を担っている（Isabelli-García, 2006）。本研究の協力者たちも、そのほとんどが日本留学への期待の一つとして「日本人と友だちになること」を挙げている。しかし、その一方で「日本人の友だちが作りにくい」という現実に直面し、問題を感じる姿が見られる。短プロに在籍する留学生の多くが、日本人学生のコミュニティとの隔たりを感じる傾向にあることは、恒松（2007）などにも指摘されている。本研究の協力者らが「日本人の友だちが作りにくい」と考える要因として、ここでもZプログラムの持つ性格が挙げられる。

> It's very hard to meet Japanese people by ourselves, especially if you are in classes like Z program... it's all foreign student and only one or two Japanese. ＜F＞

このようにZプログラムの授業に参加する日本人学生が少ないというのは協力者たち揃っての見解である。近藤・北浜（2004）の報告では、大阪大学が実施する短プロ“OUSSEP”の特別授業に登録する日本人学生のうち、単位取得者はわずか30パーセントに留まっているという実態が指摘されている。このように、短プロの特別授業に参加する日本人学生が少ないことを、論を進める上での前提とすると、「日本人の友だちをつくる」

という期待に対し満足感を得るためには、まずＺプログラムの授業以外の場所で日本人と知り合える場所を探す必要がある。

しかし、そこで立ちはだかるのが「文化的壁」である。日本人のグループ性（グループで固まっていて、外から人をいれようとしない様子）やオープン性の無さ（留学生に話しかけようとしない、本音を話さない様子）は協力者の大多数が感じている問題である。こういった「文化的壁」を乗り越えることが、日本人の友だち作り、ひいては満足感を得ることにつながっていくが、そこに至るには、自らの日本語能力を気にせずに、コミュニケーションをとっていく積極性が必要になる（恒松，前掲）。本研究の協力者のうち、パーティに積極的に参加して友だちを作ったＢやＨ、日本語があまりできないうちから研究室のメンバーと日本語でコミュニケーションをとったＣ、道で見知らぬ人に臆せず話しかけたＤ、ミクシィを活用したＥなど、自らの日本語能力を気にせずに、コミュニケーションをとっていく積極性を持つケースの場合、概ね友だちを作ることに満足感を覚えるに至っている。一方、コミュニケーションにあまり積極的でないケースの場合、必然的に日本人側からのアプローチを待つ必要がでてくる。例えばＦの場合、気軽に一緒にご飯を食べに行こうと誘いあえるような友だちを持つことを望んでいたが、知り合った日本人側から自分にそのようなアプローチがなかったために、友だちができたと感じられず、当初の期待[3)]に反して不満足で終わってしまっている。

また、短プロ参加生が知り合う日本人学生の大多数が、彼らと英語でコミュニケーションをとろうとする傾向にあることを、多くの協力者が指摘している。こういった現象は、古くはSchumann（1980）から指摘されているが、特に英語が国際語として広く普及した現代において、英語（母語）話者は周囲から英語を話すことを求められており、第２外国語を使うチャンスが少なくなってしまっている（Kinginger，2008）。これは、とらえ方

によっては、「英語が話せて、とてもオープンマインドな人と知り合えた」と考えることもできる（C，F）が、それが日本人学生への否定的態度につながるケース（G）もある。

> The Japanese people I've got to know, lot of them were planning to go abroad so they needed someone to practice their English. So, most of my Japanese friends are those kind of people. At first, like a lot of my friend feel the same one, we feel like used because 'oh they're hanging around with us just because they want to use English,' but the thing is that we didn't come to Japan to speak English. ＜ G ＞

先行研究は、他のグループへの態度が肯定的になることがコミュニケーションの促進につながると指摘している（MacIntyre *et al.* 1998、Isabelli-García，前掲）が、G の場合、自分たちが英語を話す機会として利用されたことで、大学で出会う日本人学生に対して態度が否定的になり、コミュニケーションへの積極性が失われてしまっている。結果として出来た友だちの数は少なく、「日本人と友だちになりたい」という当初の期待とは裏腹に、不満を覚えるに至っている。

5.4. 新しい文化を学ぶ

Z プログラム参加者が留学に対して抱いている 4 つ目の期待は、新しい文化を学ぶことである。本研究の協力者全員が、日本留学の目的として「日本文化を知ること」や「これまでにない新しい経験をすること」を挙げている。今井（2007）が述べるように、日本への進学などの具体的で緊急の目的を持たない者の場合（多くの短プロ参加生がこれにあたる）、ことばの習得のみでなく、異文化における体験を持つことが大きな目的の一つである。異文化、すなわち日本における体験というと、たとえば色々なパー

ティやカラオケ、飲み放題付きの居酒屋に行ったこと（A，H）から、アルバイト（D，H）、旅行（A，B，C，E，F，H）、または初めて親から独立して一人で生活したこと（F，G）まで、かなりの広がりを持つが、この意味において、本研究の協力者たちは1年の自分の経験に対して、概ね満足している様子が感じられる[4)]。

人種差別的な、明らかにネガティブな経験をしたケース（E，G，H）もある。しかし幸いなことにGの場合は、それを批判するのではなく、理解して受け入れようとする姿勢を持っており、その上で、そのような古い考え方が若い世代から変わってきている様子を見られて「in conclusion, I love the experience here」という発言に繋がっている。またEやHの場合はネガティブな経験も含め「外国人が日本の社会に入るのは難しい＜H＞」と理解した上で「日本人のやり方を知れた＜H＞」ことに対し満足を覚え、将来日本に戻ってきたいという希望につながっている。Cも同じく、日本の習慣を時に受け入れがたく感じたが、あちこち旅行して日本建築を見られたことや、日本で建築学がどのように教えられているのかを知ることができたことなど、日本での経験を面白かったとまとめている。

5.5. 予想外の結果から得られた満足

留学期間中に予想外に得たものが、留学全体の満足に繋がるというケースがいくつか見られるが、本研究では、留学の思わぬ副産物として、「留学生の友だち」と「将来の目標」をあげるケースが多かった。まず、「留学生の友だち」に関してだが、日本に来る前は日本人の友だちを作ることを第一の目標にしていたが、Zプログラムを通して獲得した留学生同士の人間関係が予想外に良いものだったというケースが多い（A，E，F，H）。特にFの場合、先述の通り日本人の友だちを作ることに関しては不満足に終わっているが、「本当に、本当に親しい友だち＜F＞」を作ることが

できたことに対し、満足度が非常に高いため、これが全体にまで影響を与えて、日本留学に対し「満足」と言えるに至ったと考えられる。

また、その他の思わぬ副産物として「将来の目標ができた」ことをあげるケースも見られた（B, D, E, H)。特に、日本の大学院に進学したい（D, E)、日本で就職したい（H）という日本に関連した将来の目標が出来たことを、この１年の留学の成果としてあげるケースが目立った。少数ではあるが「恋人ができた（E, H)」、「自分の性格が変わった（D, E)」ことを留学期間中に予想外に得たものとしてあげ、それが留学全体の高評価に繋がっているというケースも見られた。

5.6. 全体としての日本留学への満足

前節までで、Ｚプラグラム参加者が日本留学に対して抱いていた４つの期待と、留学中に予想外に得たものに対する、それぞれへの満足／不満足について述べてきたが、ここでは全体としての「日本留学への満足感」を得ることにつながるプロセスを考えたい。

C, D, E, H は、細かい部分で不満はあるものの４つのタイプの期待全てに対して満足できているケースである。そのため、当然の結果として、全体としての日本留学に対し、満足感を得られている。また、B, G は、4つのタイプの期待のうちいくつかが不満足に終わっているが、特に[5] 期待していたこと（B にとって日本語と日本文化、G にとって学術的知識と日本文化）に満足できているので、日本留学に全体に対し、最終的には満足できているケースである。

一方 A と F の場合は、4つのタイプの期待の中で、特に期待していたこと（A にとって新しい経験、F にとって日本語と日本人の友だち）に対して不満感がかなり大きい。しかし予想外に得た「留学生同士の人間関係」に対して非常に強い満足感を得ているため、これが全体にまで影響を与え

て、日本留学全体に対し満足感を得られるに至っていると言える。

6. おわりに

本研究により、短プロに関わる従来の研究からは明らかにされてこなかった、短プロ参加者が、留学に対する期待と現実の間で悩みつつも、満足感を覚える様子を、彼らの声を通して描き出すことができた。サンプリング等、再考しなければならない問題点もあるが、今後もこのような、留学生当事者の声に耳を傾けた研究が増えることによって、日本の大学の留学プログラムがより有意義なものに変わっていくことを期待する。

（注）

1） 現在、学部レベルで短プロを実施しているのは国公立大学だけで 31 大学ある（文部科学省ホームページ）。
2） 第 1 回目のインタビュー調査を実施した順に A から H までの ID を付した。
3） F の場合、日本人との人間関係に過剰な期待（ドラマのような人間関係）を持ちすぎていたことも、不満につながる大きな要因であったと言える。
4） A の場合、アルバイトが見つからずお金が無かったため、旅行や買い物などが十分できなかったことをとても心残りに感じているようだった。
5） インタビュー中、それに関する言及が多い場合、特に期待を持っていたと判断した。

（引用文献、参考 URL）

今井亮一（2007）「JTW プログラム　2005-2007」『九州大学留学生センター紀要』（16）119-128

隈本・ヒーリー順子、長池一美（2006）「大分大学短期交流プログラム（IPOU）の現状と今後の展望：大学教育の国際化推進に向けて」『大分大学留学生センター紀要』（3）13-22

近藤佐知彦、北浜榮子（2004）「大阪大学短期留学特別プログラム OUSSEP の現状と英語授業普及・大学国際化への提言」『多文化社会と留学生交流』（8）137-159

中山亜紀子（2001）「短期留学生の対人関係に関する一試論」『多文化社会と留学生交流』（5）59-72

中山亜紀子（2008）「韓国人留学生のライフストーリーにみる留学の満足―大学生活に対する期待との関わりから」『阪大日本語研究』（20）197-223

恒松直美（2007）「短期交換留学プログラムの英語で行われる授業：自己と異文化適応」『広島大学留学生教育』（11）9-23

廣瀬幸夫（2007）「短期留学特別プログラムが果たす大学国際化への貢献」『広島大学留学生センター紀要』（7）45-55

メリアム　S. B.（2004）『質的調査法入門：教育における調査法とケーススタディ』堀薫夫他訳　ミネルヴァ書房

Isabelli-García, C.(2006), Study Abroad Social Networks, Motivation and Attitudes: Implications for Second Language Acquisition. In M.A. DuFon and E. Churchill (ed.) *Language Learners in Study Abroad Context* (pp. 231-258). Clevedon, UK: Multilingual Mtters.

Kinginger, C. (2008), Language Learning in Study Abroad: Case Studies of Americans in France. *Modern Language Journal*, 92, 1-123.

MacIntyre, P. D, Clément, R., Dörnyei, Z. and Noels, K. A. (1998). Conceptualizing Willingness to Communicate in a L2: A Situational Model of L2 Confidence and Affiliation. *Modern Language Journal* , 82, 545-562

Patton, M.Q. (1990). *Qualitative evaluation and research methods*. (2nd ed.) Newbery Park, CA: Sage

Schumann, F. M. (1980). Diary of a language learner: A further analysis. In R. Scarcella & S. Krashen (Eds.), *Research in second language acquisition* (pp. 51-57). Rowley, MA: Newbury House.

Tarp, G. (2006), Student Perspectives in Short-Term Study Programs Abroad: A Grounded Theory Study. In M. Byram and A. Feng (ed.) *Living and Studying Abroad*. (pp. 157-185). Clevedon, UK: Multilingual Matters.

首相官邸『「留学生 30 万人計画」骨子』（平成 20 年 7 月 29 日提出）
http://www.kantei.go.jp/jp/tyoukanpress/rireki/2008/07/29kossi.pdf（アクセス日 2011 年 8 月 1 日）

独立行政法人日本学生支援機構「留学生受け入れの概況」（平成 22 年度版）
http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/documents/data10_brief.pdf（アクセス日 2011 年 8 月 1 日）

文部科学省「我が国の留学生制度の概要」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2011/05/12/1286521_4.pdf（アクセス日 2011 年 8 月 1 日）

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

Expectations and Satisfaction: Voices of Study Abroad Students in Japan

Miki KITAZAWA

This paper is a qualitative case study that aims to explore how eight students who participated in a Short-term Study Abroad Program perceived their experiences in Japan. The study revealed that their experiences were rich in variety and that the students were more or less satisfied with their sojourn, despite some frustrations experienced along the way. The interview data analysis also showed that the satisfaction felt after the program by each student was directly correlated to goals and expectations held prior to the program, which can be categorized into four groups: 1) to gain academic knowledge, 2) to learn the Japanese language, 3) to make Japanese friends, and 4) to acquire new cultural experiences. Additionally, the study found that some students also had unexpected positive experiences, such as friendships among international students and the emergence of new future goals. These experiences also enriched the international experience and had significant influences on the participating students' overall satisfaction levels.